

特別支援教育支援員の状況と研修後の認識

○木村光男

（常葉大学教育学部初等教育課程）

大井雄平

（常葉大学教育学部初等教育課程）

紅林伸幸

（常葉大学大学院初等教育高度実践研究科）

KEY WORDS: 特別支援教育支援員 研修内方法 状況と認識

1. 目的

特別支援教育支援員(以下、支援員)が役割を遂行するには、専門的な知識と技能が必要である。また、教職員との連携が不可欠である。しかし、支援員は研修を受ける機会が少なく、教職員との連携が困難な状況下においては、その職責を果たそうと孤軍奮闘する姿を目にする。そこで、本研究目的は、特別支援教育支援員の状況及び研修後の認識から、今後の研修内容方法の方向性を導くことである。

2. 研究

(1) 研究対象者

研究対象者はS県A市立の公立学校で勤務する支援員で、研修会に参加しかつ事後アンケートに回答した 20 名である。勤務校種の内訳は小学校 13 名、中学校 7 名である。

(2) 研究手続き

1) S 県 A 市教育委員会に研究参加の同意を得た。

2) A 市支援員研修会の事前アンケート

事前アンケートは、2 項目の自由記述と記名欄を設け配布し、18 名から回答を得た。質問項目は次の通りである。

① 日頃児童生徒の支援をしていて相談したいこと

② 講師に聞きたいこと

3) A 市支援員研修会

令和 2 年 12 月 14 日にオンラインで実施(支援員と A 市指導主事は A 市公民館で受講)した。講師は発表者らで、内容方法は、事前アンケートに基づいて、個別具体的な事例を数点取り上げ、発達障害の特性理解とその支援について、および学級担任との連携の在り方の視点で講義した。

(3) 研究方法

研究方法は、研修会後に研究対象者に実施した事後アンケートの分析検討による。事後アンケートは、研修会終了直後に用紙（無記名）を配布して実施した。そして、1 週間以内に A 市指導主事に送付してもらった。回答率は 91%であった。事後アンケートの内容は以下の通りである。

① 支援員の属性・概要（性別、校種、教員免許の有無、経験年数、週当たりの勤務時間・回数）

② 支援員の状況（障害の基本特徴の理解、支援の自信、やりがい、児童生徒の困難さ、校内で相談する人・相談相手）

③ 支援員の研修後の認識

事後アンケートの回答「③研修後の認識（自由記述）」から、支援員の認識特徴を抽出し、詳細かつ客観性を確保して検討するため KJ 法による質的分析を実施した。事前準備として、まず、記述内容毎にカードを作成した。カードには、その要点をコードに付記した。次に、カテゴリー化では、同一のコードを集めた上でサブカテゴリーを抽出した。そして、サブカテゴリーを分析検討しカテゴリーに分類した。

3. 結果

(1) 支援員の状況

支援員の状況（研究方法③参照）を表 1 に示した。

表 1. 支援員の状況

項目	障害の基本特徴	自信	やりがい	児童生徒の困難さ	相談する人	相談相手(複数可)
	1.理解していない 2.あまり理解していない 3.少し理解している 4.理解している	1.無し 2.あまり無し 3.少し有り 4.有り	1.無し 2.あまり無し 3.少し有り 4.有り	1.理解していない 2.あまり理解していない 3.少し理解している 4.理解している	1.いない 2.あまりいない 3.少しいる 4.いる	1.校長 2.教頭 3.学級担任 4.養護教諭 5.支援員 6.支援学級 7.その他の教諭
小学校 13名	1... 0人 2... 1人 3... 11人 4... 1人 平均...3.0	1... 0人 2... 3人 3... 9人 4... 1人 平均...2.8	1... 0人 2... 3人 3... 1人 4... 12人 平均...3.9	1... 0人 2... 1人 3... 11人 4... 1人 平均...3.0	1... 0人 2... 1人 3... 2人 4... 11人 平均...3.8	1... 5人(38%) 2... 6人(46%) 3... 8人(62%) 4... 4人(31%) 5... 4人(31%) 6... 1人(8%) 7... 6人(46%)
中学校 7名	1... 0人 2... 0人 3... 5人 4... 0人 平均...3.3	1... 0人 2... 3人 3... 4人 4... 0人 平均...2.4	1... 0人 2... 0人 3... 1人 4... 6人 平均...3.9	1... 0人 2... 0人 3... 4人 4... 1人 平均...3.1	1... 0人 2... 1人 3... 2人 4... 4人 平均...3.4	1... 3人(39%) 2... 2人(22%) 3... 2人(22%) 4... 0人(0%) 5... 3人(39%) 6... 0人(0%) 7... 2人(22%)
平均	3.1	2.7	3.9	3.1	3.7人	小2.6人 中1.3人

(2) 支援員の研修後の認識

「分析の手続き」に従って実施したカテゴリー化では、36 のコードから 8 のサブカテゴリーを抽出し、それを 3 つのカテゴリー「研修の成果・意義」「研修方法」「その他」に分類した(表 2 参照)。

表 2. KJ 法により抽出されたカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	事後アンケートの結果 ③支援員の研修後の認識
研修の 成果・ 意義	支援の在 り方	支援しやすくなった 個の実態からサポートする 支援員の介入が分かった 多様な支援をやってみる 特徴に沿った支援を知った 支援・サポートにつながる 含めること集めることが大切 ベストな手助けを考えた 子どものできることを促す 良さを見つけ覚める 安心した 個々に合った支援に 子どもの困りに向き合う	分析の手続きに従って実施したカテゴリー化では、36のコードから8のサブカテゴリーを抽出し、それを3つのカテゴリー「研修の成果・意義」「研修方法」「その他」に分類した。
	自己の見 直し・反省	一人一人と向き合うべき 覚えて子どもの味方になる 支援を見直す契機になった 子どもにとっての支援員 子ども理解と関係性 子どものつまずきを優先 感情的に言いすぎた	事前アンケートによる事例検討 リポート 事後アンケートがよかった 具体的に理解できた 事例を示してくれてわかり易い
	担任との 連携	担任の考えとむを合わせる 話す時間を作る コミュニケーションを深める 連携の大切さ 時間が足りない	今後に向けて 担任との関係をもっと聞きたい 研修を増やして欲しい 支援員に聞くことを聞きたい
	自己研鑽	発達障害の基本特徴・支援の方向性が明確に 自己課題の発見	生徒が気の毒 教師の叱責 テスト

4. 考察

(1) 支援員を巡る状況

支援員の状況(表 1)を校種別に検討する。「やりがい」は小中で一致した。しかし、「障害の基本特徴の理解」では、中学校支援員が理解の平均値が高いものの「支援の自信」に関しては中学校支援員が低かった。これは、中学生に対する支援の難しさを示している。支援員の校内における「相談相手」は、中学校は小学校の半数であった。中学校は支援が難しい上に、相談相手が少なく支援員は孤立し易い状況である。また、支援員の相談相手としては、校種に関係なく管理職と学級担任および他の支援員であった。

(2) 支援員の研修後の認識

支援員は、事前アンケートによる事例に基づいて支援やサポートの在り方を解説した研修内容・方法について、ポジティブに捉えていた。そこでの支援員は、他者の事例(具体的対応)であっても、自分事として捉え、自己の行った支援の見直しや反省の場になっていた。

(KIMURA Mitsuo, OI Yuhei, KUREBAYASHI Nobuyuki,)